

ヨハネの手紙第一 2章 19-21節 「注ぎの油がある人」

1A 初めから仲間ではなかった人々 19

1B 出て行く者たち

2B 明らかにされる背教

2A 真理を知っている者たち 20-21

1B 聖なる方からの油 20

2B 知っている真理の確認 21

本文

ヨハネの手紙第一 2章を開いてください、今晚は 19-21 節を見て行きます。「¹⁹ 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。²⁰ あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。²¹ 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。」

1A 初めから仲間ではなかった人々 19

私たちは、前回 18 節のみを見ました。ヨハネの話は、18 節からそのまま 19 節以降につながっているのですが、18 節の内容が盛りだくさんあったので、一節だけに留めました。18 節には、こう書いてあります。「¹⁸ 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」幼子たち、と呼びかけています。それは、信仰をもって間もない人たちにも、今は終わりの時なのだということを知ってもらいたいからでした。私たちの多くが、キリスト者になった時にそのような教えは聞いていなかったと思います。けれども、これが使徒たちの一致した教えだから、教えないといけません。そして、反キリストが来るといふ、聖書全体に一貫した預言を学びました。主ご自身が警告し、使徒たちも警告しています。キリストが再臨される前に、偽キリストによってサタンが多くの人々を惑わすということです。今、その不法の秘密が強く働いていることを学びました。

そして、「今や多くの反キリストが現れています。」と言っていますね。ここまで大胆に言っていますが、これは反キリストの霊が働いていて、多くの者たちがその霊によって教えているということです。ヨハネは、非常に生々しく、その多く現れた反キリストについて話します。それが 19 節です。

1B 出て行く者たち

まず、「**彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。**」と

言っています。「中から出て行」ったというのは、教会の仲間であったのに、そこから出て行ったということです。これはとても辛いことですが、現実にかかることなのだということを、使徒たちは手紙の中で何度となく話しています。

イエス様が、その模範、いや先例を見せてくださいました。イスカリオテのユダです。主が夜通し祈られて、十二弟子を選ばれましたが、その中にユダがいました。けれども、主は少しずつ、ユダが仲間ではないことを明らかにされます。ガリラヤのカペナウムで説教を行われた時に、多くの弟子たちが去りましたが、ペテロたちは去りませんでした。ペテロは、「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。」と言ったので、主は言われました。「ヨハ 6:70 わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。」公生涯において、かなり前からユダのことを語っておられたんですね。けれども、弟子たちは誰一人として、ユダのことを疑いませんでした。彼は財務係をしていましたから、相当イエス様から信頼されていると思っていたことでしょう。最後の夜で、ユダに対して「あなたがしようとすることを、すぐにしなさい。」と言われたのを、弟子たちが聞いて、その意味を分かっていた人はいませんでした。それでユダが出て行ったのです。他の捕らえる者たちと共にやって来て、ようやくイエス様を裏切ったとことが分かったのだと思います。

しばしば、「ユダは初めから自分が偽りの弟子だと分かっていたのでしょうか。」という質問を受けます。偽りの教えを垂れる教師についてもそうです。私は、正直、分かりません。聖書にも、偽教師のすることや語っていることに対する警鐘は鳴らしますが、彼らの動機までは詳しく語っていません。はっきりしているのは、具体的な動機は分からなくとも、「もともと私たちの仲間ではなかった」というのが答えではないか？ということです。イエス様に属しているようにしているけれども、元々、属していないので、化けの皮が剥がれるということだと思います。ユダの手紙には、「1:19 この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。」と言っています。分裂を引き起こしているのは、御霊を持っていない、生まれつきのままの人間だから、ということです。

そして、イスカリオテのユダのような人間が自分たちの間から出てくることを出て来ることを警告しています。パウロがローマ人へ次のように言っています。「16:17-19 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。18 そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。19 あなたがたの従順は皆の耳に届いています。ですから、私はあなたがたのことを喜んでいますが、なお私が願うのは、あなたがたが善にはさどく、悪にはうとくあることです。」分裂とつまずきをもたらす者から遠ざかりなさいと警告していて、なぜなら、彼らは主キリストではなく、自分の欲望に仕えているからだ、とのことです。ここでは御霊を持っていないとまで入っていません

が、前提としてそういうことでしょう。

けれども、「滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています」と言っています。言葉がうまいのです。なので、幼子、ここでは「純朴な人たち」の心をだましているのです。けれども、「あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくある」ということですね。ですから、幼子であっても、いや幼子だからこそ、御父のことを知っていて、悪については知らないでいることができる、ということです。偽教師は、多くの知識をもって誘惑します。権威もつかって誘惑します。尤もらしいことを言います。けれども、御父を知っている、神を知っているという知識については、幼子こそが持ち合わせているのです。

その他、使徒たちでペテロは、第二の手紙でこう言っています。「2:1 しかし、御民の中に偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。」中から出て来るのです。パウロ、ヨハネ、パウロ、三者がすべて、偽教師が仲間から出て来ることを話しています。今、知られている異端の創始者は、まともな教会の人であることから良く分かります。エホバの証人のチャールズ・ラッセルは、元は長老派の教会の信者でした。そして異端ではなくとも、そもそも考えが違うのに、仲間の中心的な役割をしているということは、しばしば起こることです。一教会においても、教会の群れにおいてもそうです。

そして、それが終わりの日の時に起こるのだということを知る必要があります。パウロがテサロニケ第二 2 章でこう話しています。「2:3 どんな手段によって、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。」背教が起こり、それから不法の者、反キリストが現れ、主の日、終わりの患難の時が来ます。

そしてヨハネの言っていることで注目に値するのは、これです。「もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。」彼らの教えていることは、尤もに聞こえます。正しいように聞こえます。けれども、仲間に留まることができていないところで、彼らの教えが主に属していないことが明らかになっています。それは、交わりにある知識だからです。「1:3b 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」主との交わりがある者たちが互いに交わるのであり、互いに交われない者が主との交わりがあるということではできないのです。今日にある偽りは、個人主義に基づく信仰です。つまり、インターネットが普及して、自分独りでも信仰を持てるような空気があることです。周囲がいかに間違っているかを唱え、人と距離を離していくのですが、そのような姿勢こそが、反キリスト的な教えに近づいているということを知らないといけません。

2B 明らかにされる背教

そして、「しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるた

めだったのです。」と言っています。終わりの時は、隠れていたものが明らかにされていく時です。イエスは、パリサイ派とサドカイ派の偽善を、パン種と呼びました。全体の中に少し種が入っていると、粉全体を発酵させるのがパン種です。初めは分からず、人々に広がっていくのですが、後で明らかにされます。続けてこう言われます。「ルカ 12:2-3 おおわれているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。」このように、隠れているものは明るみに出されるのです。

天の御国の奥義の喩えが、はっきりと終わりの日におけるイエス様のなされることを、語っておられます。毒麦の喩えです。良い畑に良い種を蒔きましたが、人々が眠っている間に敵が来て、毒麦も蒔いて立ち去りました。毒麦が生えてきたので、しもべたちが主人に、「13:28 私たちが行って毒麦を抜きましょうか。」と言いましたが、主人は、「13:29 いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。」と答えています。これは、みことばによって広がる神の国、教会の中に偽りの教えの種が入っているけれども、それを今、取り除こうとすると他の良いものも抜き取ってしまう、ということです。ですから、毒麦は育てていくばかりです。それは、主が何もなされないことを意味しません。こう言われています。「13:30 収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に収めなさい。」そうです、明らかにされたところで、主は怠りにない裁きを行われます。「13:39-42 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫は世の終わり、刈る者は御使いたちです。40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのようになります。41 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、42 火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」必ず、終わりの日には明らかになったものを裁いてくださるのです。

教会の中にある罪や偽りを対処するにあたって、パウロはテモテに助言を与えています。「Ⅱテモ 5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。25 同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままであることはありません。」ですから、先走った判断、裁きをすることのないように、という戒めも、コリント第一 4 章であります。

2A 真理を知っている者たち 20-21

けれども、ヨハネは幼子のような信仰を持っている者たちに対して、これらのことを脅しているのではなく、むしろ励ましています。

1B 聖なる方からの油 20

²⁰ あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。

ヨハネは、大胆にも「**みな真理を知っています**」と言っています。グノーシス主義者は、真理を知ることのできるのの一部の者だけで、その者たちが神に近いというエリート主義を取っていました。私は、キリスト教の世界で、「キリスト教会は、これこれのことを知らない。」と見下して、自分の考えていることと違う人たちが、あたかも真理が隠されているかのように語るのを聞く時、いつも警戒します。グノーシス的な臭いを感じるからです。真理というのは、「みな知っている」というように、イエス・キリストを知る知識において、とても単純なものなのです。この方を知っているか知っていないかの違いなのです。

「**聖なる方**」と神のことを呼んでいます。これは、被造物から隔絶している方、全く影響を受けず、汚れとか罪からも離れている方、ということです。私たちの周りが、どんなに偽りや惑わしが多くとも、聖なる方がおられるのだという信仰です。

その聖なる方が、油を注いでおられるということです。「油注ぎ」という言葉、私たちには、なかなか分からないものです。旧約聖書の、祭司制度の中に数多く出てきます。祭司たちが任命される時に注がれるものです。「出エジ 40:15 彼らが油注がれることは、彼らの世々に渡る祭司職のためである。」主のもの、聖なる者とされて定められ、守られています。さらに、主に仕えるための祭具にもすべて油を注ぎます。それらが聖なるものとなるため、つまり、他の使用とは異なる、神のものだけに使われるためです。

つまり、注ぎの油があるというのは、私たちキリスト者が御霊によって、聖別された、聖め別れたということでもあります。パウロはコリントの人たちに、淫乱であるとか群像礼拝であるとか、盗む者、酒におぼれる者、奪い取る者、そういった肉の行いをしていれば神の国に入れないと断言しましたが、こう言っています。「I コリ 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

そして、御霊によって初めて真理を知ることができます。御霊は真理の霊だからです。イエス様が弟子たちに言われました。「ヨハ 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。」そして、御霊によらなければ、御霊に関することは分からないとしてパウロは、コリント人たちに教えています。「I コリ 2:12-14 しかし私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神からの霊を受けました。それで私たちは、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るのです。13 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属

することは御霊によって判断するものだからです。」

ですから、知識を掲げて、知っている、知っていないという世界ではありません。自分の神を、アバ、父と呼ぶことのできる、そういった親密なつながりこそがまことの真理であり、それを知っているかどうか、なのであります。そういった間には、私たちの思いを超えたところの、互いの交わりがあり、そこから離れるということは、その真実な知識を持っていなかったということにすぎません。

2B 知っている真理の確認 21

ヨハネは、信者たちを励まします。

21 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。

再び、「このように書いてきたのは」といって、手紙を書いている目的を明らかにしています。手紙を書いているということは、知らないことを知らせるためと思ってしまうかもしれませんが、いいえ、むしろ知っているのだよと励ましているのです。使徒ペテロも、第二の手紙で、知らないことではなく、既に知っていることだけでも、思い起こして奮い立たせるためだということを話しています。「Ⅱペテ 1:12-13 ですから、あなたがたがこれらのことをすでに知り、与えられた真理に堅く立っているとはいえ、私はあなたがたに、それをいつも思い起こさせるつもりです。13 それを思い起こさせて、あなたがたを奮い立たせることを、私は地上の幕屋にいるかぎり、なすべきだと思っています。」逆に、反キリストとヨハネが呼んでいる偽教師たちこそが、真理を知らないために偽りを宣べていると言っています。

私個人、牧会者として、皆さんにいつも強く感じていること、伝えたいことがこれです。もう真理は知っています、ということです。聖霊によってすでに知っているのです。そして、私がみことばを伝える時には、それは聖霊の油注ぎによる確認であり、既に知っていることによって、信仰が培われて生きていきます。すでに知っているイエス様のことが、さらに信仰の目によって明らかにされて生きていきます。何も知らないからという劣等感というか、不安を抱えないでください。それはあたかも、救われているのに、救われていないかのようにみなし、改めて救われなければいけないと思ってしまうことです。そうではなく、主がもう真理を与えてくださっています。そして、新たにこれこそが真理だとする教えを見分けて、振る舞わされることなく、養われていくことです。「エペ 4:14 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」